
幻想に舞い落ちた獣人

暇な人

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

幻想に舞い落ちた獣人

【Nコード】

N1449W

【作者名】

暇な人

【あらすじ】

東方の二次創作です、独自解釈や独自設定があります

幻想入り・・・て言うらしい（前書き）

東方シリーズ二作目、相変わらずの駄文ですがよろしく願いします

幻想入り……言うらしい

朝目が覚めたら、そこは森だった

何を言っているのかよく分からないと思うけど俺も意味が分からない、それともっとよく分からないのが自分の姿

犬耳尻尾（多分）に足と手に肉急がある、ケモ属性の男ってどうよ昨日悪いもんでも食ったか？ てかまず昨日なにしてた、思い出してみるか

朝起きて飯食って夕方までバイト、そして家に帰ってシャワー浴びた後パソコン弄った後晩飯食って睡眠

何時もと変わらない生活してたハズなんだけどな、変な人物に声をかけられた覚えも変な空間に引き摺り込まれた覚えもない

「さっぱりわかんね、誰か説明してくれ」

……鳥が鳴いた、俺も泣いて良いかな？ マジで泣きたい、ビ

デオ延滞しちまうよ

ああ、これからどうしたら良いんだよ

「取り敢えず歩いてみるか、なんかあるかも知れないしな」

十五分後

なんにもない、それどころか人っ子一人見付からねえ

なに、なんなのここ

俺なんか悪い事した？ してないよね、何が悲しくて獣人みたいな姿になって訳の分からない場所にいなきゃならないんだよ

「あら、見掛けない顔ね。もしかして外来人かしら」

「お姉さん！！！！ 見付けてくれてありがとう！！！！ 寂しきで死んじゃうとこだったよ」

「わかったから離れなさい、抱き着かないの」

そう言われお姉さんから離れる、だってマジで寂しかったし心細かったんだもん

「私は八雲紫よ、あなた名前は？」

「夜神幽良です、でいきなりですけど此処はいつたい」

「幻想郷、あなたがこれから暮らす事になる世界よ」

幻想郷？ 俺が暮らす事になる・・・世界！？

どういうこっちゃ！！ もう今までいた世界には帰れませんっていうパターンですか！！

んなどこぞのファンタジー小説みたいな展開がリアルに起ころうとは

「それで、俺のこの姿って」

「何かの妖怪かしらね、まあ良いわ。調べてあげるからちょっとじっとしてなさい」

？ 取り敢えずこの姿がなんなのか調べてくれるみたいだし、指示通りじっとしとこう

そして紫さんが何か真剣な表情でこっちを見た後ウインクしてきた、

終了の合図で良いのか？

「終わったわよ、あなたの身体に出てるソレは狼のやつよ。それと、能力も見付かったわ」

「能力？」

「ええ、それは後で話すわ。まずは着いてきなさい、私の家でゆっくり話しましょ」

そう言って紫さんが妙な空間を開いた、え入れ？　すみません恐怖で動けません
目でそう訴えたらご丁寧に足元に開いてくれまし、て落ちるううう
うう・・・

なんか、命が幾つあっても足りないような場所に來た気がします

幻想入り……言うらしい（後書き）

後書きを任された幽良です、読みは「ゆら」な質問やおふざけ程度にやって欲しい事を感想に書いてくれたらここで行うらしい

でもんなもん毎回来るわけないから、殆どが補足や詳しい説明のコーナーになる

で今回は俺の容姿を軽く説明しとくぞ、黒い狼耳尻尾に手首から先が狼の物になってる

足も同じくだ、後は手首の少し後ろから毛が生えてんだ勿論足も同じく

だいたいこんなところだな、詳しくはまた今度

能力が被る可能性があるかも知れないけど気にしないでくれよ、相当ある二次創作全て確認する気力は作者にはないからな
それにやったとしても半分は忘れてる

んじゃ締めといこうか

感想やご意見、指摘など色々待ってます

次回も楽しみにしてくれ、それじゃアディオス

住居決め・・・らしいよ（前書き）

ん
幽良が住む場所を決めてもらいます、八雲家だと思った方すいませ

住居決め……らしいよ

「ぬええええん、あべし!!」

顔面強打しました、猫みたいに来るかと思ったけどんな事はなかった

やっぱ犬科だからか、てかどこよ此処

「無事、ではなさそうだな」

「狐？」

「まあ言いたい事は沢山あると思うがまずは中に入ってくれ、話はそれからだ」

狐のお姉さんに連れられて家の中へ、そこで待っていたのは紫さんだった

紫さんが居るって言う事は此処は八雲家ってワケか、というか紫さんから凄いプレッシャーを感じるんだけど

「まあ座りなさい、藍あなたもよ」

「「はい」」

「幽良、あなたの能力は「姿を変える程度の能力」よ」

姿を変えるねえ、つまりドッペルゲンガー？

「と言っても質量を大幅に変える者以外になる事は出来ないから、あなたがイメージ出来る者になれるわ」

「あの〜紫様？　なぜ私は呼ばれたんでしょうか？」

「最初は藍みたいな姿になってもらう為よ」

藍さんみたいにか、でもこんな綺麗な人みたいになれるか？
そこはイメージしよう、いつもみたいにアニメのキャラを思い描くように

「それじゃさっそく、ってもう始めてるようね」

狐耳に九本の尻尾、服装は・・・巫女って憧れるよな

「でやああああ！！」

「竜にでも変身するのかしら」

「残念、狐巫女です」

なんかドジった、身長157ぐらいの狐巫女になってしまった
一応成功で良いのか？　性別は・・・女になってました、女性を見ながらイメージしたからかな

「藍をイメージしたのよね？　ならなんで巫女なのよ」

「イメージしてる途中に「巫女って憧れるよな」って思ったからです」

呆れた顔された、仕方ないじゃないか

二次で三大萌え要素は縞ニーソにミニスカに巫女なんだから、前バイト仲間にこれ言ったらアホ言われたけど

「まあ成功ね、それを応用すれば手と足ぐらい簡単に変えられる筈よ」

「うし、やってみるか・・・」

元の自分の姿、自分の姿
肉急じゃなくて人の手足、さっさと戻りやがれ

「うっしや成功」

「飲み込みが早いわね、それじゃ次はこの幻想郷について話すわね」

く少女説明中く

「つまり・・・幻想郷には妖怪や人が共存して暮らしてて、スペルカードルールっていう決闘方法を取っている。外の世界とは隔離された場所が幻想郷で結界は博麗の巫女と紫さんでだいたい維持してるって事ですか？」

「まあそんなところよ」

最初聞いた時はビックリしたけど、人食い妖怪が普通にいたりするんだから

それと能力関係で1つあることが分かりますた、手と足は一時間経

ったら元に戻る

つまり獣属性はどうあっても消せないわけです、ホント何かの呪いじゃねえだろうな

「で、あなた住む場所は決めてるの？」

「決める時間もなかったような気がします」

「そういえばそうね、じゃあ先ずは霊夢のところに行きましょ」

少年とお姉さん移動中

紫さんに連れられて博麗神社に着いた、のは良いんだけど物凄く不機嫌な顔をしながら此方を睨んでる巫女さんがいました、巫女ってもう少しおしとやかなイメージがあったんだけど

「で、この獣男を私と一緒に暮らしさせて欲しいってワケ？」

「ええ、まあそういう事になるわね・・・」

「却下、他を当たりなさい。私一人だけでも生活が大変なのわかってるでしょ」

「あゝ、1つOK？」

「なによ」

ギロツと此方を睨まないで物凄く怖いから

「神社に客が入るんなら住まわせてくれる？」

「入るんなら良いわよ」

「っしょ、もしかしたらここで住めるかも」

「でもどうやるのよ、御守りも売れてないのよ？」

「今の時代どこでも萌えを求められています、ならば幻想郷でもそれに便乗しようじゃないか！！」

「「は？」」

俺が考えた客が来るであろう内容を説明しよう

まず博麗神社に見習いの巫女が現れたと噂を流す、それを聞いた人達はどんな人物なのかと興味を示し様子を見に来る

そして、そこには脇を出してせっせと働く少女の姿が
という内容です

「見た目はどうするのよ、これが一番大事よ」

「こうすればなんとか・・・でやああああ！！！！」

「竜だったらぶっ飛ばすわよ」

叫び声変えよっかな、変身した後密かにそう思った

「こんな感じで」

「「これは・・・」」

今の姿を簡単に説明すると、14、5ぐらいの少女が巫女服を来ています

容姿は黒い長髪を一本結びにしている

ただこれだけです、見た目はニー○レスのイブをイメージしました後は耳尻尾のオプション付き、どうやっても消えないんだよ

「一週間、その間に最低十人は集めなさい。でないと悪魔城に押し込むから、それと一人称はぼくで通しなさい、後絶対に素を出さない事わかった？」

「・・・はい」

住む場所を決めるだけなのになんか物凄く疲れそうだ、いやこんな提案した自分が悪いんだけどさ

まさか本当にやろうとするとは思わなかったからさ、後紫さん呆れて帰らないで下さい

なんか、これからが物凄く不安だ

住居決め・・・らしいよ（後書き）

この小説は100%の妄想で出来ています、皆さんの嫁が大変な事になっても俺は責任をとりません

さて今回は能力の説明するぞ、さっきの注意？ 作者に渡されたカ
ンペに書いてあったただだ
んじゃ気を取り直して能力の説明するぞ

（能力名）

姿を変える程度
の能力
別名ドツペルゲンガー

・・・まあなんだ、別名で察してくれ
能力を詳しく説明すると

・ 普段の姿の場合は獣要素は絶対に消せない、出来ても一時間で元
に戻る

・ 姿を変えてる場合は耳尻尾だけ残る

・ 元ネタのように服装だけ変える事も可能

絶対に作者の悪意を感じるな、てかニー○レス知らない人物からし
たら頭に？ 浮かんでるぞ

まあ良いか、文句は作者が受け付けるだろうから
それじゃ締めに入るか

感想や質問、ネタ等色々待ってます
ではまた次で会いましょう

危険なメイドさん・・・(前書き)

急展開過ぎた、だが反省はしない
後悔は物凄くします

危険なメイドさん……

「お賽銭お願いしまーす」

三日間、朝叩き起こされて賽銭集めて来いと言われて集める毎日です
最初に十人分は集めろと言われた時は簡単だと思ったけど、まさか
烏天狗と魔女ぐらいしかこないとは
しかも参拝客ではなくただのバパラッチと友人だからノーカン、マ
ジかよ

「あややゝ、頑張ってますねゝ」

「そりゃ頑張るでしょうよ、でなきゃ悪魔城行きなんだから」

「ここは1つ、この射命丸文が一肌脱ぎましょう」

「なら先ずはスカートから脱ごうか」

そう言ったら踏まれました、ちよつとした冗談なのに

「で、一肌脱ぐってどういう事よ」

「文文。新聞の記事にします、そして興味を持った方が博麗神社に
足を運ぶという」

「成る程、頼んだ」

「そうですか、なら先ずは簡単な取材をさせていただきますね」

よしこい、どんな取材でも答えてみせる!!

プライベートな内容は言わないけど

「ならまず好きなタイプを」

「可愛い子、美少女、そしてA〱Cカップの女の子!」

「A〱Cカップの女性が好き、とでは次に趣味を」

「寝る事、女の子を見つめる事」

「・・・・・・変態の一步手前ですね」

まだ危ないお兄さんじゃない、手を出してもいい
そして何よりロリコンじゃない

「このまま書くと百合女ですが大丈夫ですね、では!」

「・・・・・・しまったああああ!」 つい正直に答えてたけど今
はキャラ作ってんだったああああ!」

「五月蠅いわねえ、なに叫んでるのよ」

「あややの取材に素直に答えたら百合女になってしまったてこのまま
じゃ色々ヤバイ気がするんだよお!」

「自業自得じゃない、このまま百合女として頑張るなさい」

一部の人間には受けそうだね、今でも少数の人が来てるからね
ただし目的はケモ少女、お賽銭を入れる事はしない・・・・ってふざ
けてんのかよ、神社に来たならお賽銭入れてけよ

「そんな事よりもすぐお昼だから何か作って、材料は極力使わずに和風で」

難しい注文を言ってくれる、少ない材料で和風作れって言われたら

「こんなのしか出来ません」

「ご飯に味噌汁にキャベツの千切り、朝御飯みたいね」

「黙って食え」

少女食事中……

「そういやあんたは帰りがらないわね、今までの奴らなら帰る方法探しはじめてるのに」

「ああ、別に。家族とか友人の事分からないから幻想郷にいただけだから」

あれ、なんか変な事言った？

霊夢が体を乗り出してきたんだけど

「それって記憶喪失ってやつじゃないの！！　なんで黙ってたのよ！！」

「……ああ、そうなんだ」

「自覚がなかったのね、てかどこか抜けてるでしょ」
「多分……？」

「どうしたのよ、キヨロキヨロして」

「いや、なんか妙な気配が」

「そんなものあるわけ・・・伏せなさい!!」

いきなり霊夢に指示されそれに従う、意味は解らなかったがすぐにわかった

ナイフだ、どこから現れたか分からないけど頭の上をカスって床に刺さってる

「失敗しちゃったわね、でも次は外さないわよ」

「どういうつもり」

「レミリアお嬢様に命令されたのよ、博麗神社にいる外来人を連れてこいってね」

「まだスペルカードも持っていない人物をあんなところに連れて行かせないわよ」

「残念だけど、既に捕まえたわ」

いつの間に、いやそれよりどうやってここまで

気配を消したにしては静かすぎる、それにあのナイフ

あれはいつたいどこから出した、考えろ考えれば分かるハズだ

「もしかして、時間を止めたり出来たりしますか?」

「良くわかったわね、私の能力は時を操る程度の能力よ」

「そりゃスゴイです、ね!!」

「っ、抵抗するなら痛い目にあうわよ」

正直なんで近くにあったナイフで攻撃したのか分からない、だけど今連れて行かれたら何か大変な事に巻き込まれるような気がする

「幽良、これに妖力を込めなさい」

「カード？ まあ良いか」

霊夢に投げ渡されたカードに妖力を込める、するとなんか絵と文字が表れた

変化「」、「」の中に何も書かれてない
失敗か？

「別れの挨拶は済んだようね、いくわよ」

「っ！ 危ないなあ、もう少し手加減してくれよ」

「それは出来ない相談ね、あなたはもうすぐお嬢様のところに連れて行かれるのだから」

マジだな、てか幻想郷では決闘ルールがあるんじゃないのか？
完全に無視してるぞこりゃ

「外人人には幻想郷のルールは通用しないわよ、だから私は何も言わないし手を出さないから。それと、暴れるなら外に出なさい」

マジでかよ、こりや紫さんに説明された以上に危険な状態じゃないか
そういや説明の途中で「吸血鬼とメイドに気を付けなさい」って言
われてたな、まさかこんな早くに会うなんて予想だにしてなかった
だろうな

「時よ」

「変化「幼き悪魔の妹」」

「止まれ」

危険なメイドさん……（後書き）

急展開にも程がある、はい後書きのコーナーだ

つつてもあまり喋る事がない、取り敢えずスぺルカードの軽い説明
しとくか

変化「」

「」の中はその場その場で変わる

今はこれぐらいだ、んで記憶喪失っぽいらしいんだが
戻った時の性格どうなるんだ？ いやそれより戻るのか？

まあどうにかなるだろ、次回は戦闘に入るとは思うけど期待はしな
い方が良い

それじゃもう締めるか

感想等色々待ってます、ではまた次回にて

狂気という檻に閉じ込められた小鳥・・・・・・・・（前書き）

厨二病と呼べるような内容です

狂気という檻に閉じ込められた小鳥……

あのメイドが時を止める前にアイツが何かを呟いていたわね、多分スペルカードだとは思うけど

なぜレミリアの妹になってるのよ、しかも妖力や殺気まで本人そのもの

これじゃまるで

「まるでコピー、したみたいね」

「紫、あんたいつからいたのよ」

「霊夢がスペルカードを渡す辺りから覗いてたわよ」

「はあ、であれが何か紫は分かったの？」

「見た限りだけど、彼に渡したスペルカードは五枚よね？」

当たり前じゃない、って言おうとしたけどアイツが持ってた数は一枚だけじゃない

残り四枚はどこへ消えたのよ

「そう、五枚の内あるのは一枚だけ。もしもよ、あの一枚が五枚分の力を持っていてそれがあのコピーだったとしたらどうする？」

そんな馬鹿な事があるわけ……でもそれ以外考えられないわね
アイツの存在自体まだ良く分かってない、今までの事を全く覚えてなくて目が覚めたら幻想郷に居たって言う事ぐらいしか分かってな

いし・・・

「今は二人の戦闘を見ましょ」

「そうね」

私が時を止める前にあの外来人が何かスペルを発動してたけど気にしない方が良いわね

「そして時は動きだす・・・!？」

「なに、驚いてるの？ さあ早く遊ぼ？」

なぜ妹様が私の目の前に、しかも威圧感とかも本人そのものまさかあの外来人が変化したとでも？

「ねえ咲夜、良いこと教えてあげるね」

「なん、ですか？」

「私は咲夜の記憶の集合体みたいなものなんだよ、つまり咲夜が怖がれば怖がれるほど私は怖くなるんだよ」

「なら私は貴女を倒す事だけを考えるわ」

「ふふ、初めてなのに物凄くワクワクする」

ゾクッ、フランお嬢様ではないのに見た目はそのまま
あまりに不気味で、笑えない

時を止めても見透かされてしまいそうな程冷たい目で私を見つめて
笑っている、本物以上に恐ろしい

「レーヴァテイン、フォーオブ」

「やらせないわ!!」

「ふん!! たかがナイフじゃやられないよ?」

フランお嬢様のスペルカードまで、私の記憶を元にしてるとい
うのは嘘ではないという事

そしてさっき私がとっさに封じれると考えた矢先に封じれた、ならば

「貴女はレミリア・スカーレットの妹ではない、ただの外来人よ。
さあ、本性を表しなさい」

「っと、まさか弱点があるとは思ひもなかった」

やはり、私がどこかでフランお嬢様として見てたようね
だけどこれでもう私の目の前にいるのはただの外来人

「大人しく着いてきてもらおうわよ」

「……分かった、ただしあんたの主人に会いに行くんじゃない
くてその妹に会いに行く」

あのメイドさん、驚いてるな

精神が不安定で能力も強力、そんな人物に会いに行くんだ
簡単に言えば自ら火山に飛び込むぐらい無謀な事、それでも考えを
変える気はない

「あなた、正気なの？ フランお嬢様の力はあまりに強力なのよ、
しかも精神的にもまだ幼い。なにされるか分からないわよ、それで
も行くって言うなら好きにきなさい」

「好きにさせてもらうわ」

そしてメイドさん、咲夜に案内されながら吸血鬼の住む館・・・紅
魔館へ向かう

少年少女移動中・・・

「ここが紅魔館よ、私はレミリアお嬢様に報告してくるから、あな

たはそこで頭から血を流してる門番に地下まで案内してもらいなさい」

「本当に行く気なんです、死んでも私は責任とりませんよ」

咲夜からの説明を聞いた門番、中国（何かそう呼ばれてた）が地下まで案内してくれるそうだが

だけど何か戸惑ってるような、見ず知らずの人間をいきなり死なしたくないのかね？

まあどちらにせよ、俺は会いたい

彼女に、長い間檻に閉じ込められてた鳥を解放したい

「……………こっちです、着いてきて下さい」

そう言われ着いていく、光が届かない地下

蠟燭の火以外何も見えない、そして大分歩いて漸く扉が見えた
紅く血に染まった扉が

「妹様、“人形”を持って来ました」

「ありがとう、めーりん。あなたが新しい人形？　簡単にコワレナイデネ」

恐怖、それが彼女を初めてこの目でみた時の感情だった

見た目は少女そのものの、だが眼は狂気に染まっていた

なぜ自分がそんな事を知ってるか分からない、だが彼女の瞳には切なさを感じる

狂気に飲まれ、抑え込む事の出来ない悲しさ

それと同時に、血を欲する本能

二つが混ざりあい、自分でも分からない何かが爆発してる

だから、だから俺はこんな無謀で馬鹿で笑える行動を取ったんだろ
うな

たった一つの感情が大きくなって

「ネエ、ハヤクアソ・・・」

「え・・・」

「一人でもう苦しまなくて良い、もう自分に負けなくて良い、お願いだから・・・無垢で無邪気な、レミリア・スカーレットの妹、フランドール・スカーレットでいて下さい」

彼女を抱き締め、優しく言葉をかける

自分を殺そうとしてた少女に恐れを感じる前に、そして・・・

「うう・・・ひぐ・・・なん、で・・・なんで私は泣いてるの・・・
なんでこんなに暖かいの・・・なんで、なんで私はこんなに長い
間一人でいたの・・・」

「妹様・・・ぐす」

――守りたい、ただそれだけの思いが自分を動かした

一人ずつと狂気と戦って、一人で長い間地下に閉じ込められて、表
に出る事もなくずっと裏で頑張ってた

だから俺はただ守りたかった、まだ精神的に幼い彼女を
狂気の妹ではなく、ただのフランドール・スカーレットを

「ぐす、ねえ聞いて良い？」

「なぜ、自分にあんな言葉をかけたかって？」

「うん」

「前に誰かが、同じような言葉を言ってた気がするんだ。フランと同じ状況の子にね、だから俺はただ真似ただけ……檻の中に閉じ込められて自由に羽ばたけない鳥をね」

「……ありがとう、私本当にどうかしてたんだね。長い間地下に閉じ込められて、時間が経つに連れて「私は知らない子なんだ」って思って、そして気がついたらもう誰も私を見てなかった、見られてたのは“狂気の妹”で“フランドール・スカーレット”は誰も見てなかった……」

「よしよし」

今自分に抱き着いて泣いてるのはフランドール・スカーレットだ、それは紛れもない真実

「人間のくせに良くそんな事が出来たわね、幽良」

私は正直あの人間がもう既にフランに殺されてると思ってた、数日前から狂気に飲まれて暴れてたのだから

ところが様子を見に行ったら私の予想とは真逆だった、あの子がただの人間に抱き着いて泣いていた

能力は姿を変えるだけ、なのになぜ……なぜフランの運命までもが変わっている！！

今まで一回も変わった事がなかった運命がなぜ今になって、今日までフランの運命はどう転ぼうと狂気に飲まれていく物しか見えなかった

なのに！！　なぜ幸せそうに笑っているフランが見えるの、何年後か分からない未来にはあの子は幸せになれるわけね

でも一つだけ分からない、なぜ私達ではなくあの人間・幽良が接触して変わった？　ほんの十数分前に会ったばかりの人間が吸血鬼の本能を抑えさせた、私や咲夜、パチエに美鈴でも出来なかった事を

「人間のくせに良くそんな事が出来たわね、幽良」

「あんたが、レミリアか？」

「ええ、先ずは礼を言わせて貰うわ。フランの運命を変えてくれてありがとう、次に質問よ……あなたは何者かしら」

聞いた話しだと記憶喪失だそうだけど何かありそうなのよね
八雲紫や霊夢は無害だと判断したそうだけど、どうかしらね

「何者って聞かれてもな……記憶が無いから分からないし」

「そう、なら戻ったら教えて貰うわ」

「わかった、約束するわ」

約束、ね

私が生きてきた中で最も信用出来ない言葉よそれは、フランをもう地下に閉じ込めないと約束したのにまた閉じ込めてしまった私が思うのもおかしいけどね

「良かったわねフラン、彼が紅魔館に住む事を選んでくれて」

「いや、誰も住むとは一言も」

「あなたが一番最初に私に教えてくれると約束したじゃない」

「いや、だから……謀ったな」

シャ○、なんとなく言いたくなっただけよ意味はないわ

「言葉の受け取り方よ、それじゃこれからよろしく頼むわね」

「よろしくね、幽良♪」

「私の邪魔はしないで下さいね」

「暇になったら何時でも門に来てくれて構いませんよ、毎日暇だから」

「不幸だ……」

これから余計騒がしくなりそうね

狂気という檻に閉じ込められた小鳥……（後書き）

どうも、毎度お馴染み主人公の幽良です

いきなりだけどスペルカードの補足と説明を

変化「」

相手の記憶を元に姿を変えるスペルカード、口調やカリスマ等全てをコピーする

一枚で五枚分の力を持つてから出来る事である、ただ相手の記憶が元なので完全に否定されたらすぐに解ける

そのためまともな戦闘なんて出来なかった、決して作者が思いつかなかった訳ではない

一応スペルカードはこれだけだな、それと咲夜の外来人発言だが実際にはそれも本当かどうか怪しい、あれは今までが今までだった為今回もそうだろうという先入観に過ぎない

後最後に女性の姿の幽良のイメージ

某萌え○んのグラ○ナをイメージしたら早い

一応こんだけ、というか最後はいらないような気がするな

さて、作中に「長い間檻に閉じ込められた」って言ってるが別に地下だけを指してる訳じゃない

狂気もある意味檻なんじゃないか？ という風に作者は考えてるらしい

（コレ読んで、渡すの忘れてたb y作者）

ん？ 内容の補足

レミリアは数日前と言ってるが実際は一ヶ月ぐらい前です、それとレミリアが見た運命は一番近い物であって確実な物ではない、ただど大きく変わるような事は滅多にないので確実と思われる、だからフ란の未来が今まで見た物と真逆の内容になってる事に動揺した

自分の中では運命＝確実に近い未来という解釈をしています

スペルよりこっちのが大事だろ、後は下の方に妙な内容ですいませんって書かれてるだけだなんじゃ、感想や意見等が言ってくれそれじゃあまた次回

幽良の性格がころころ変わってるのはまだ手探り状態だからですb
Y作者より

思い出した欠片、それは・・・（前書き）

幽良何か自分の過去に繋がるかも知れない物を思い出しました

思い出した欠片、それは・・・

「今日も何か借りにやってきたぜ」

「魔理沙」

「何時も以上に元気だな、何かあったのか？」

「うん!! あかね「ん、客？」あ幽良!!」

なんか魔女がこっちを珍しそうに見てるんですが、確かに珍しいと思うけど

「あゝ、霊夢が言ってた変身ワンコか！」

「変身・・・ワンコ・・・ププツ」

「ワンコじゃなく、狼です」

「犬科には違いないぜ」

そういう問題じゃないと思うんだ、多分

「というかお前の名前なんだ？ 私は霧雨魔理沙だぜ」

「自分は夜神幽良、よろしく」

互いに挨拶を済ます、というか前に神社で会ったハズなんだけど・・・
・あのときは挨拶してなかったっけ確か

それから適当に会話を交わしてさようなら・・・は出来ず

「んじゃ私は帰るぜ、さようなら」盗んだ本を返してからよ」パチ
ユリー、私は返しただろ？」

「一冊だけね、残り六十五冊も返しなさい」

六十五！？ 借りたら返して下さいよ、それともそういう教育受けてないのですか？

「・・・さらばだぜ！！」

「幽良！！」

「はい」

「私を止められるものなら止めてみせろー！！！！」

箒で逃亡、でも残念ながら扉は内開きなためこうなります

「グエッ！ 前までは両開きだったのになぜ・・・」

泥棒対策です、窓も鉄格子つけるよう提案したし
ちなみに自分が紅魔館に来てから既に三週間ぐらい経ってます

「泥棒対策よ、窓も鉄格子付けたから逃げられないわよ魔理沙」

「誰だ、そんな知恵をレミリアに教えたのは」

「そこの半獣よ」

パチュリーはまともに呼んでくれるんですね、でも出来れば名前で呼んで欲しかったなあ

「門番を雇っても意味がない事に気付かないレミリアにまともな案を出しやがって、こうなったら・・・お前を借りてくぜ!!」

「えーと、それはつまりお持ち帰りって事ですか？」

ヒュー、寒いなあまだ夏のハズなんだけどなあ

フランとパチュリーが凄い睨んでるよ、魔理沙は少し頬を赤くしてるし

「由来、あなたにプレゼントよ。」

大丈夫、ちよっと痛いだけだから・・・」

あの〜スペルカードを手に取りながら言わないでいただけますか？

正直物凄く怖いです

「ダメだよ？ 幽良は私の物なんだから私のそばに居なきゃ、そうだ今度鎖を買って来てあげる。そしたらもう私のそばから居なくなるらないでしょ？」

嗚呼、もう終わりですね

二人とも殺気だってるし、フランに至っては目のハイライトが消えかけてるし

なぜこうも運がないのでしょうか、誰か運を分けて下さい

「「かああああくうううごおおお!!」」

「ピチューン」

「目が覚めたらそこは、知らない天井だった」

「なに馬鹿な事言ってるのよ、それより少しは此所の雰囲気慣れたかしら？」

「ええ、とりあえず普通の人であれば既に死んでるという事はわかりました」

いや正直普通に驚きましたよ、あの後フランに抱き着かれて咲夜さんに睨まれるわ

パチュリーには解剖されそうになるわけで、もう最初の二日間は何度「あ、死んだな」って思ったか

「で、なんで敬語？ 少し前まではそんなじゃなかったわよね？」

「なんかこっちの方がしっくりくるもんで、今まで自分的には無理してたような気も・・・」

「確かに今の口調の方がなんとなく自然体に見えるわね」

記憶を失う前はもしかして誰にでも敬語を使ってたんでしょうか、まだ良く分からないなあ

「とりあえずゆっくり取り戻すと良いわ、時間はまだ沢山あるのだから」

「そうですね、それでは失礼しました。それと目が覚めるまで居てくれてありがとうございます、咲夜さん」

ふう、ここの人達がちょっと癖があるけど優しい人が多いですね
まるで家族のように接してくれてるし、まあ少し過激なスキンシップもあるけど

「あら、もう身体は大丈夫なのね」

「珍しいですね、レミリアお嬢様が昼間に起きてるなんて」

「ちょっと来客が来てたのよ、それで終わったからもう一回寝にく所よ」

「そうでしたか、それではおやすみなさい」

それにしても来客か、いったい誰なんでしょうか
まあそこまで気にしても仕方ありませんね
一応宿を与えられてる身ですし

「そうね、でも貴方に関係する事よ」

いたんですか、それにお客様って紫さんでしたかって自分に関する事ですか、なんとなく聞きたい気もしますが聞かないでおきましょう

「あら、貴方に関する事なのに聞く気ないのね。まあ良いわ、どうせ後から分かる事だから」

「つまり過去の自分に関する事なんですね」

「ええ、でも心配しなくて良いわよ。　今も昔もそこまで変わりはしないから」

「そうですか」

「それじゃ、また会いましょう」

・・・・・・今も昔も変わりはしない、か
それならば良いが、ただ全てを思い出した時に皆さんの事を覚えてられるかが心配ですね
まあこればかりは時間の流れに任せていくしかありませんか、さあて今日も庭の手入れに行きますか・・・

1つ、何かがはまった気がします

思い出した欠片、それは・・・（後書き）

皆さん久し振りです、夜神幽良です

今回から敬語になります、「いつ思い出したんだよ」と言う方もいると思うので簡単に説明しておきます

フランに敬語を使った後からちよくちよく無意識に使ってたんです、詳しくは忘れましたがある程度たった時に自分で「こっちが普段から使ってた口調なのでは」と思った辺りから自然に出るようになり今に至ります

あとは紅魔館の出入口でしょうか、これは作者が「そーいや良く逃げられるけど入り口は両開きか？　なら内開きにしまえ」という無駄な考えをした結果です

以上ですね、ではまた次回にて

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1449w/>

幻想に舞い落ちた獣人

2011年11月24日17時49分発行